

TVで無人島生活、タレントの若者がそんな番組に出演し、衣食住を楽しんでいる姿を写している。本当に一人で無人島にすておかれたら、たった一人で勝手にせよといわれたら、想像を絶する苦勞が待ち受けている。あくまでも娯楽番組、心配はいらない、危険はないが、タレントの演技も面白い。もし、本当に無人島なりに置き去りにされれば、文明社会を知っている我々は脆いものだ。まず何が必要だと考えた。とにかく腹が減る、すぐに夜が来る、空腹と寒さは苦痛を通り越して死の危険が付きまとう。サバイバルコンサルタントなんて職業があれば、まず何をすべきか、何を探すべきか、というようなマニュアルがあるのだろうけれど。

オレの30年のつたない山登り経験から自分なりに考えてみた。山では、今夜はここで寝ようと決めたら、まず幕営場所を決め、地面を踏み固め、石ころをどけ、水はけをよくし、という作業のあとザックからテントを出しはる、荷をその中に入れる。一番目に居場所の確保だね。テントがなければ、立ち木を探し、枝なり葉なりを利用して、雨露を防ぐ場所作りが大事だね。オレは漁撈も狩猟もできない、草や木で食べるものを探すとはいえ、毒をもったものもたくさんあるので、食料には困るだろうね。火をおこす、これは大事だろうね。ボーイスカウトなどを経験した人たちは、この火をおこす作業は知っているのではと思うのだが、オレは経験ない。小さい火種を作る、最初の発火が難しいだろうね。燃えやすい細い乾いたくずのような繊維、棒をこすりつけあわよくば煙が出てくれと祈りつつ、根気よくこすりつけていると、その繊維が発火する。火種ができればまずは火がおこるだろう。

大阪府立弥生文化博物館著<海を見つめた縄文人> 工藤雄一郎著<縄文人の植物利用>二つの本を所々読んでみる。一万年前に日本にいた縄文人のことが、最近いろいろわかってきたらしい。オレの知識、半世紀前の教科書に知識をはるかに超えて、びっくりするようなことがわかってきたらしい。「獣を追いかけ、獣の皮を身にまとい、弓と槍で野山を駆けめぐり、日々草の上や木の上で寝ていた」というのではないらしい。ここ10年20年、低湿地帯の遺跡を掘り起こすと、いろんな遺物が、腐らず、溶けず、ある程度形で出土するそうだ。技術も機械も測定方法も進歩した。食料の種類や食べ方、住居の形や材料、糞まで出てきている。今までの想像で、そうではないのかということ、もうこの時代にこんなものがあつたのか、いろんなことがどどんわかってきたらしい。考古学は今まで、考古学者の世界だったが、それこそ美術の専門家、工学、理学(生物・地学・宇宙)というような毛色の変わった人たちがチームに加わっているようだ。

鈴木三男著<縄文人がウルシに出会ったのはいつ?>という項が目にとまった。まわりにウルシを材料に作家活動をしているアーティストが何人かいる、オレ自身はウルシをさわったこともないけれど。縄文時代にすでに、ウルシを装飾用に使っていた、そういう技術があつたのは驚き。著者の鈴木先生は植物・考古植物が専門らしい。

◎ウルシは日本国中にあるが、先生は日本国中を調べまわり、日本のウルシは栽培されたものしかないという。野生ウルシを求め揚子江中流域を訪ね、村中に栽培されたウルシの村を見つけた。その村の山地帯で雑木林の中に野生ウルシが普通に生えているのを発見。ウルシは中国の広い範囲に分布しているようです。

◎縄文時代の遺跡から、漆の遺物がたくさん出てきました。古いものは放射性炭素年代測定で12600年前のウルシ材だそうです。

◎漆製品には装飾性の高い飾り弓があり、漆塗りの典型的な技術があらわれてます。弓の樹種をどう選択する、細部のたくさんの装飾は、何らかの巻き付け、別素材をつけて加工、漆塗り技術が集約されています。中央部には漆としては大層肉盛りされたざらつき面が一周しています。おそらく紐状の繊維を巻き付け上に漆を塗りそこに、粗い砂を混ぜたか擦り付けて太くかつ滑り止め効果のある握り部を作ったものと思われます。糸あるいは紐巻きも多く用いられています。(先生には失礼ですが、工芸品に近い漆塗り弓、これらの工芸品の説明は、工芸作家に頼まれた方がいいですね、へたですねえ) <略>縄文生活すべてが、豊かな色彩表現に満ちあふれていたかもしれません。

◎漆にとって、いちばん大事な、ごみを漉す布、大量の漆漉し布があつたはずなのが、現時点で一点も確認されていません。用具では刷毛や筆やへら等も一点も出土していないようです。

縄文の続き。先日の本をパラパラめくっているだけで、面白い記事や写真やイラストが出てくる。「10000年前の縄文人がすでにこんなことをしていた こんなことを知っていた」驚くというよりはなるほどと感心する。こんなに発達していたなら、衣食住以上に、マインドの問題、宗教の問題、村や家族の問題があったと思うが、学問の世界では、想像はない。想像して、勝手な物語を作るのは自由なので本のパラパラから目についた部分を書いてみました。

◎食料のイラストで、アザラシ、クジラ、マグロ、タイと出ている。クジラは、偶然浜に近寄ってきたとしても、マグロ、タイを常に食料にしていた、ということは、漁撈技術がすごい。クマが書かれていないのはなぜだろう。

◎編組製品とは籠・敷物のこと、近代なら、藁、イグサ、竹などを編んでいた。半世紀前の農家で使われていた日常生活の籠や敷物と変わりがない製品が、復元されている。模様までついているのには感激。

◎遺構に使われている材木に、クリが多い。現在の森林でクリが占有する林はない。クリだけを集めるのは大変な労力が必要。長い年月、多くの人力、計画性と日々の管理、縄文人は、最近までの日本の村の在り方と違わない。

◎石器：石をくくりつけた斧で伐採実験をしている。直径45センチのクリで、1時間45分かかったそうだ。

◎ダイズ、アズキを栽培していた。とはいえ学者先生たちの実験農場を見ると、山のふもとの雑木林のなか、焼き畑なり、草刈りのあとに、ぱらぱら種をまく、摘み取るという状態。今のような、畑や畝ではないようだ。

◎圧痕レプリカ法：土器は粘土で造るときに、遺物が中に紛れ込んだり、外側に押しつぶされたり、とたくさんの情報が残っているらしい。粘土彫刻で、型を取り、作品を造ると同じ方法で、土器にシリコンをあてると、型が浮き上がる。土器を造るときに、何の上に置いて造った、その時、ごみが、種が、虫が、紛れ込めば、それらの形が浮き出してくる。なんの繊維で織った布、その編み方は、それらがわかるそうだ。

◎12600年前旧石器時代の終わりころ、まだ氷期の時代、自生しないはずのウルシが、日本にあった。そんな古い時代に大陸から、ウルシ文化が伝わった？野生のウルシがあった？（植物学的には、考えられないことだそうだ）

◎漆塗りの杓子の柄・弓。写真で見るとちょっとした工芸品。石の刃物でよくもまあここまで、造れたものだ。

◎麻。麻の布、これは昔の日本人、庶民の代表的な繊維だと思っていた。ただ、大麻取締法により、実験栽培の許可がないとはびっくり。確かに今でも麻の服はなかなかいいものだけれど、布の元の麻は大麻のこと？これで調べると、面白いことを発見。縄文時代の麻とは、大麻だった。現在の麻繊維は、亜麻（リネン）のことで、10000年ぐらい前、チグリス辺りで発展し、明治になって日本に入ってきた。ちなみに、綿花は江戸時代。

◎縄文時代は単なる、狩猟、漁撈、採集の社会ではなく、高度な植物の知識を持った縄文人が積極的に植物を利用し、管理や栽培まで行っていました。縄文人は、アサ、クリ、トチノキ、ウルシを生活圏内に巧みに栽培し管理していました。さて、縄文人はいつ頃、イネや雑穀と出会い、どのように水田稲作を始めたのでしょうか。中国の長江中流域が野生の稲の北限でした。中国では15000年前ころに、野生の稲の採集を行っていたが、7000年前ころ栽培稲が確認されている。中国で拡散した水田稲作は3000年前に朝鮮半島へ、日本に渡ってきたのは何時なのか、まだまだ研究中ということらしい。発掘現場の写真を見ると、下から、縄文時代晩期の泥炭層、洪水砂層、弥生時代前期の粘土層と解説が書かれ、この中から、遺物を探し、顕微鏡で調べているそうだ。遺物の宝庫だそうだ。

◎中国で水田稲作が始まったころには、すでに稲作と雑穀の複合農耕が行われていました。それを受容した日本の初期稲作も、イネだけでなく、アワやキビらの複合農耕でした。稲と雑穀の栽培は、縄文時代から連綿と続いた、マメ栽培や堅果類、ベリー類の利用体形に、徐々に加わったものでしょう。

◎物流の話。アスファルト。縄文前期から接着、充填、黒色素として使われていたが、産地は北海道や東北地方、そこで加熱、精製、精製カスを捨て、アスファルトを作っていた。それらは他の地域の縄文遺跡で使われていた。骨角製の釣り針、鈿、ヤス、矢じり等と、柄の接着部に使われていた。ほかに、破損した土器や土偶の接着や補修、象嵌にも使われていた。漆にアスファルトを混ぜ、黒色塗料にも使われていた。アスファルトのことは初めて知った。

◎「土器・土偶造りは、女の仕事」とおっしゃるが、本当かな。「上に顔があり 腹あたりの穴からの顔 これは出産の形 上の顔は母親 下の顔は子供」「ほんまかいな」単に人体土偶や顔の模様と思っていたが、驚いた。

◎成人女性の人骨に、櫛・笄（こうがい）・耳飾り・首飾り・腕輪が残っている。彼女はシャーマンだ。「ほんまかいな」

立松和平著<芭蕉「奥の細道」内なる旅>この本で立松先生は、禅僧の道元が残した著書「正法眼蔵」の話を多く語っている。禅宗<曹洞宗>永平寺の開祖、傑僧の話、千年を読み語り継がれた話、難解な話、一二度聞きかじった程度では何もわからない。わからないといいつつ、一二度聞いた言葉がまたもや出てくると「そうか わかった」というつもりにもなってくる。オレなりに、わかったような、わからないような部分をひろいだし、ならべてみた。オレのやり方は、姑息で稚拙だけど、初心者マークということでお許しを。

「正法眼蔵」

◎学道の人は先ず、すべからく貧なるべし。☆オレ：「貧なるべし」とは思わない 富であつてもいい それこそ貧富なんて どうでもいいこと 生きること 考えることが大事だ」ただ宗教人が、営利をむさぼってどうする。地位・名誉・金を欲しがってどうする。それでなくても寺の本堂はキンピカなのに。すべての人が、地位・名誉・金に群がる今、「もっていない」と下を向いていうが、こんなことをいわせる、よくない社会だね。

◎学道の人は後日を待て、行道せんと思うことなかれ。ただ今日今時を過ぎさずして、日々時々を勤むべきなり。

☆オレ：仏道の修行者でなくても、「いずれそのうち」はよくない。オレも人によくいわれ、人によくいった。あの時もっと励むべきだったと思う反面、人に度々「やりなさい」といったことは悔やまれる。

◎この一日の身命は、たふとぶべき身命なり、たふとふべき形骸なり。☆オレ：昨日も明日もなく、今の今だ。

◎仏道をならふというは、自己をならふなり。自己をならふというは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり（大宇宙の真理にまかせる）。☆オレ：この話はよくわかる。最初の「仏道」を「生きる」に置き換えると、オレにとっても素晴らしい言葉になる。「大宇宙の真理にまかせる」という訳が気になる。道元師の本音なのか、訳者の希望なのか、オレなら「空に浮かぶ」にしようかな。この言葉は、おきにいいだ。

◎むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。☆オレ：「愛語」という言葉は良寛さんの中に出てきた。訳者は（愛しみの言葉）といている。直接聞くとうれしくなり、人づてに聞くと心底響く。皮肉をいうがこれは、人誑し（たらし）の極意なり。

◎ただまさに、やわらかなる容顔をもて一切にむかふべし。容顔とは優しい顔なり。古希まじかになり、わかるねえ。

◎文筆詩歌等其の詮なき事なれば捨（すつ）べき道理なり。☆立松先生：鳥が空を逸脱することができないように、魚が水を逸脱することができないように、芭蕉も言葉を逸脱できない。☆無常迅速・生死（しょうじ）大事：時はたちまちすぎ、生死を究めることが人生の大事である。わずかに命のある間、業を修め学を好むならば、ただ仏道を修行し仏法を学ぶべき。文筆、詩歌は結局役に立たないのだから、捨てるのが道理である。

◎十二頭陀行：修行僧の手引きかな。若いころの道元、弟子を育てるのに、厳しい規則を作った。昔、初代の若乃花が、「おすもうさんの修業は 軍隊と同じと思ってくれ と 親に語った」というセリフを思い出す。

1) 人の招きを受けず、日々乞食し、修行僧の一食分を金銭では受け取らない。2) 山上に止宿して、村や町に宿まらない。3) 人に衣服を乞わず、受けない。死人が着ていた服を着る。4) 野田、樹下に止宿する。5) 一日一食。6) 横にならず、座って眠り、経行する。7) 三枚の衣-三領衣。僧団、王宮、村で説法や托鉢の時着る大衣。礼拝、聴法、懺悔の集まり用の中衣。日々の作務、就寝用、小衣。8) 寺に住まず、在家の人と住まず、仏を見て座禅・求道する。9) 一人で住む。10) 木の実、草の実を先に、次に飯を食う。11) 露宿せよ。12) 肉、醍醐を食うな。

◎「鳥飛んで鳥のごとし」道元の有名な言葉「魚行つて魚に似たり、鳥飛んで鳥の如し」は、もともと、「水清うして地に徹す、魚行つて魚に似たり、空ひろうして天にとおる、鳥飛んで鳥の如し」である。◎正覚禪師訳：思量を超えて思量の世界に現れものであり、対立を超えて対立せるものの世界に現れるものである。思量を超えて思量の世界に現れるものであるから、その現れた思量は不思議とひとつであり、対立を超えて対立せるものの世界に現れるものであるから、その現れたものは無対立とひとつである。思量は、無思量とひとつであるから、そのものには何の汚れも留めないのであり、ものは無対立のひとつであるから、そのものには何の対立も残さないのである。何の汚れも留めない思量であるからその思量はいくら思量しても思量の執われをぬけており、何の対立も残さない。残さないものであるからして、その対立はいくらものとしてあらわれても、ものとのらわれを超え出ているのである。

☆オレ：これを読むと、禅の奥深さが伝わるが、ほんとに、こんなに難しいことを言っているのだろうか？物語の中に「鳥」と「魚」が出てくる。「鳥」と「魚」を主人公にして、人のありかたを言っている、というのではないのかねえ。下記の松岡先生が言うように、一字一句を拝聴するのではなく、「道元を遊んでみよう」ということに気がついた。

◎松岡正剛著<ドーゲンのボーケン>道元を読むというのは、あまりに本気になると面倒なことが多いのだけれど、少々遊ぶ気分になると、こんな愉快なものはない。そもそも道元の思想は「一切同時現成」にある。これはすべての実在や現象はそのままそこにおいて、同時に、自身の去来の周辺にあらわれるものになるはずだというもので、それならそれらについての言葉もまた、どのようにも同時現成するだろうということだ。このことを道元は「正法眼蔵」を漢文の文法を勝手に変えながら独特の和風漢文に綴ってみせたことによって、闍達に証明して見せた。私は長らく「正法眼蔵」を親しんできたが、いや遊んできたが、読むたびに道元の言葉が、一語が十語に広がり、十語が一語に集まるようになっていくことを思い知らされてきた。

面白いものを見つけた。花和浩明著<瑩山（けいざん）の言葉>瑩山は道元の死の11年後に生まれた曹洞宗の僧、道元に次ぐ傑僧だそうだ。

◎黒漆の崑崙夜裏に奔る。☆真実とは何かと問われると答えを探そうとするが、どこにもない。自分自身の中にある。

◎茶の逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す。☆大切なのは今この時。

◎人々悉く道器なり。人は誰もが極められる。道器とは仏道を修めること。

◎風吹かば樹動き、春來たらば花開く。☆不通にあるがままのこと、人もあるがままの尊さ。

◎道は山の如く、登ればますます高し。徳は海の如し、入ればますます深し。

◎道情世事、すべて管するなし。☆仏の道、世間、分別にとらわれない。あらゆるものが自由無碍であり、これが仏の崇高な道だとか、世間の俗なる道だとか、そんなことを超越して淡々とする。出典インド「俱舍論」

◎もと無徳の処、果然として得たり。☆中国僧の言葉「本来無一物」

◎夫れ（そ）座禪は直（じき）に人をして、心地を開明し本分に安住せしむ。☆座禪とは人から学ぶものではなく、自己の真実を体感し、悟りの境地にいることを確認する作法。

◎緑水青山是れ経行（きょうひん）の処、溪辺樹下是れ澄心（ちょうしん）の処なり。☆経行とはゆっくり歩くこと。澄心とは心を静かに整える座禪の作法。

◎常に大慈大悲し（だいずだいひ）に住して座禪無量の功德、一切衆正に回向せよ。☆いつも慈悲心の中にわが身をおき、座禪の徳をすべての人と分かちあえ。

◎もろもろの衆生を救済せん。別願の一切は管せず。☆すべての人を救いたい。それ以外の願いはない。

「愛語」道元師の言葉とは思えなかったが、いい言葉だ。

「愛語」ということは、人々に接した時に先ず慈愛の心を起こし、相手の心になって慈悲の言葉をかけることである。一切の暴言・悪言を吐いてはならない。愛語は必ず愛の心からおこるものであること。<中略>

朝、寝ぼけまなこで、寒いと思ひ毛布をかぶった。「あれだけ暑かったのが・・・」とつぶやきながら、「またまた 仕様もないことを つまらないことを 言って・・・」とつぶやく自分がいる。夏になれば、冬になれば、暑い、寒いと騒ぐのはやめよう、もうこれしかいうことがない歳でもあるまい、ほかにたくさんいうことがある、と思ひながらも、道端で近所の方々に逢うと「あついねえ」「さむいねえ」といわれ「ほんとにねえ」と答えている自分の姿に苦笑。あの暑い夏の日々、アトリエで立っているだけで汗が流れ落ちた。昼寝をしようとシーツをひろげ寝ころんだ。うとうとして起きると、シーツが汗で濡れている、そんなシーツの濡れも、しばらくすると乾いている。「こんな暑さもあと何日 すぐに過ぎる」と思っている間に、案の定、すぐに終わった。最近の体内時計、時間の経つのは、日の経つのは早い、どんどん過ぎていく、過去だ、未来だと躊躇する暇もなく、今が無くなっていく。「今が大事だ 今だ」と先日も読んだばかりなのに、これといった今もなく、経過だけが在る。

知人友人の歳を顧みると、五歳下、十歳上という方々がおられる。十歳下、二十歳下という方々が少ないと俄然、これはいけない。先日も、九十歳代の元先生「仲間は全部いなくなった 若い人が付き合ってくれるから いいけど」という話を聞いた。先生という環境、後輩やら教え子やら、うまく付き合えば、自分の子供の歳の友達、孫の歳の友達なんてあり得るが、オレにはそれが無い、いかんねえ。オレの少し年上の友人たち、昔は先輩だと一歩下がって話していたが、お互い老境に入れば友人でいいと付き合っている。老境に入られた方々も「身体がえらい 頭がぼける 酒が飲めなくなった」といいながら、たしかに若々しさは無くなっておられるが、おしゃべりは以前にもまして元気そう。ただ、オレは今も絵を描いている、絵の話を、想いの話をしたい、聞きたいと思うが、みなさんもはや引退され、世間一般のニュースや TV の話題になってしまって、これはどうもついていけない、はなしたい話ができない。「やつめ ますます おたくだね」なんてみなさま方から揶揄されているやら。オレは六十歳ぐらいからか、酒の量が減った、飲んで、酔って、クダをまく、ということが少なくなってきた。どうも酒というもの、酒の旨さもさることながら、飲んで、酔って、クダをまく、忘我の境地、まわりが見えず自分勝手、そんな状態で飲んでいたのである。酒席で、冷めた頭でまわりを見ると、「くだらないねえ オレも こんなふうだった・・・」とぼかばかしくなり、酒席が遠のいていく。もちろんまだまだ飲むが、ちびり楽しんでいる、かつての酒飲み友達と、肝胆相照らすというような飲み方は遠慮するようになった。そうすると、ヒトとも疎遠になっていく、寂しい限りだけれど、これも人生。

先日までやっていた水彩画の整理が終わった、四十歳五十歳のころに描いた水彩画を整理、修繕、撮影に 3.4 カ月かけた。いよいよ絵を描き始めている、描き始めて 2.3 週間経った、やっとエンジンがかかってきた。パレットナイフの予備はないかと探していると、箱の隅にピグメントのビン類を見つけた。これを買ったのはまだ三十歳代かもしれないが、ほとんど使うことなく収納されている。ピグメント (pigment) とは顔料のことらしい。パソコンプリンターのインクが、顔料だの染料だの言っているのは聞いていたが、「なんだ ピグメントのことか」といまさらながら驚いた。絵の具や塗料の色の元だそう。顔料という色の元に、油を混ぜれば油絵の具、アラビヤゴムを混ぜれば水彩絵の具、ニカワを混ぜれば日本画絵の具になる。ピグメントを買って絵の具を自作してみよう、という魂胆だったが、キャップを開けチューブを絞れば、完全な絵の具がすぐに使える今の状態は抗しきれなかった、じゃまくさがりのオレには、自作絵の具は要がなかった。

絵が売れない、そんな状態がずっと続くが、描けるだけでもありがたい。キャンバスはある、絵の具もある、次の絵、また次の絵、構想はどんどん膨らむ。半年先には展覧会の予定がある。「オレは具象画家だ」と思っている、ものの形、ヒトの形、そんな形を抽象化した絵だ。40, 50 代のころの絵を見て、「え こんなに 抽象だった」と思う絵がたくさん出てきた。我ながら、元の具象の形が思い当たらない、「なにを描いた絵だったのか・・・」と戸惑ってしまった。戸惑いながら「なんとか 具象のにおいを つけよう」と強引に捻じ曲げた、そういう絵が何枚もあった。この夏の水彩画の修繕は、これからの絵かき生活に、力をくれた、どんどん描くぞお。

自転車で大阪に出た。「大阪？ 大阪に住んでいるんじゃないの」といぶかしく思われる方もおられるやも。子供のころからオレにとって“大阪”は大阪市内のこと、現在住んでいる場所は“茨木”とっています。幼いころの場所が鳥飼であり、友人の住まいが豊中であり、八尾でありということです。「自転車で」とよく驚かれますが、電車で1時間、自転車で1時間半、2,3か所まわれば自転車の方が早いこともあります。ただ今日の目的地梅田は、電車で30分ちょっとで行けるので、梅田やその手前は電車で行くことが多い。

2時、家を出発、まず淀川に向かいます。現在の仁和寺大橋、鳥飼村、鳥飼村立“鳥飼小学校”がわが母校、その淀川土手の上をまず下流に向かう。幼いころに暮らしていた“カネカ”の工場を横に見て、鳥飼大橋を渡り、淀川左岸の河川敷に出る。何度かいろいろ試みて、橋を渡ってすぐに左折、その土手斜面を無理して土手下に降りるのが一番いいとわかった。同じようにやっている奴が多いのか、土手斜面一部の草がなぎ倒され、いつもヒトの通っている痕跡があります。あとはスイスイと毛馬の閘門まで走るのだが、この道、河川敷内にある舗装道、緊急自動車用なのか、河川管理用なのか、なんだか知らないが、何か所かに閉じられた扉、その横に自転車用通路とはいえ、鉄の杭に横桟が出ている、ゆっくり走るか、下りて押すか、この引っ掛かりが、スイスイ走行の棘になっています。なぜあそこまで通りにくい杭を打たねばいけないのか、よほどスピードを出して通過されたくないのか、幅の広い自転車、子供用補助車輪の自転車は通行不可能かもしれない。

淀川の河川敷、この場所は本当にいい、「こんないい場所はないよなあ 都会の真ん中で」と思う。長さは20,30キロぐらいしかないかもしれないが、土手のなか、川が蛇行し、右に左に広い平地、ワンドもいくつか残っている。「イタセンパラを再び」という看板がいくつか立っている。どこかの水槽で飼われているのを見たことがある。調べると、淀川の象徴的な魚だそうで、1999年に見られたのが最後だとか、100匹、200匹放流しているとか載っているが、どんな奴にしろ、絶滅の声は寂しいねえ。

オレは、悪ガキではなかったので、土手の中のワンドで、魚を捕まえるとか、泳ぐとかはしたことがなかった、それこそまわりの悪ガキが“ケツノアナ”をまる見せにして潜っていくのを、指をくわえてみていた。大人もウナギにドジョウ、コイにフナを捕まえ食っていた。カラスガイと呼ばれていた、手のひら大の黒い二枚貝がワンドのそばで落ちていた「くさい」と叫んでいた。“泳ぐ”の話だが、じつは泳げなかった。10歳ころに、カネカの社宅の真ん前に厚生施設の25メートルプールができた。喜んで毎日通いやっと泳げるようになったが、いまだに、海へ行くと足の立つところまで歩き、岸に向かって泳ぐという習慣は守られている、という笑えない話。

広々とした自然が続く、緑がある、水がある、風がある、空がある、いつも行っている安威川に比べ数倍のスケール感、素晴らしい場所だ。今の住まいは、淀川は遠い、安威川のまだ向こうと、遠いところを流れている、近ければ、安威川に通うより淀川に通いたい、というのが本音だ。安威川もいいけど、といまさら言っても遅いかな。

いつもは毛馬の閘門から左に曲がり、大阪城から大阪市内にはいるが、今日の目的地は梅田なので、淀川沿いに市内に入り、梅田を目指す。初めて通る道、くねくね曲がる、遠くのビルが見えない、ここはどこだと思いつつ、くねくね。梅田はよく知っている、と思っているが、知っている梅田は電車を降りて10分20分歩いたところだけ、そこから離れたところは知らないのだねえ、梅田近辺にもこんな路地が、こんな長屋が、と東京に下街の画像に似た風景を発見してうれしくなるやら驚くやら。路地を通り抜けると車がたくさん走る大きな道路が見える。大きな道路に出ると、信号が、道路標識が、見たことのあるビルが見える。あれに向かってもう少し走り左に曲がれば目的地というあんばいだ。梅田、堂山で用事を済ませ、帰途についたが、荷が重い、ふらつく、でこぼこ道ではタイヤが傷む、こんなところでパンクは御免だ。「こっちか」「あっちだ」と曲がりくねっているうちに、方向がわからなくなった。大きい道へ出て走っていると“梅田”の標識、あわてて方向修正、あれよという間に“長柄橋”にでた。このまま左岸の来た道を戻ろうかとも思ったが、橋を渡っていた。ぽつぽつ降りだし、帰るころにはおおいに濡れた。

朝7時、相澤・前川・増谷さま方とオレの四人、吹田ICからまっすぐ富山に向かう。今回の目的地は立山。予定では一週間前の計画だったが、大型台風で順延した。順延したのにまたもや天気が悪い、と思案していたが、二日前になって、山に登る中日の天気が好転した、「これならいける 前後が雨でも 山は登れる」ということで出発した。

「幹のまわりが10メートルもあるという、さすが、でっかい木だ」このあたりは原生林、杉も自然に生えたものなのか、植林されたものに比べ、背が低くなんだか、もこもこしている。標高2000メートルを超える広大な台地、獣もたくさんいるのだろうが、こうも頻繁にバスが通ると、獣君たちもいやだろうね。バスは1500メートルも高度を上げてくれる。時間が経つにつれ高度が上がり、木の形が変わってくる、風雪に耐えねじ曲がり、太い幹の巨木たちも豪快な姿をしている。この形を見ているだけでも元気がもらえる。余談だが、録音ガイド君、バスの通行料が5万円という、除雪で有名なこの道路は有料道路だったのだ。バス代が高いのもうなずける。

このあたりの原生林、ぼちぼち紅葉が始まっている。緑の中に、赤色、黄色がちらほら。どんより曇り空、今夜あたりは雨かもしれない、テントの雨は嫌だけれど、明日は晴れて登山日和だとか、明後日はまた雨だという。

今、バスに乗っている、夏のシーズンなら1時間2時間待たされる人気コースだが、大型バスに20人ぐらいしか乗っていない。しとしと降る雨のなか、2:20発のケーブルで、立山駅から美女平まで7分間。次に2:40発のバスが、美女平から室堂バスセンターまで50分間、往復4310円なり。途中スーパーマーケットで食料品の追加、2時に立山駅に着いた。車も駐車場がすぐにあり、急いで着替え、駐車場から走り、あわや扉が閉まるというところで、慌ててケーブルにとび乗った。

バスの録音ガイド君、右が左かと山の名前を言ってくれるが、聞いたことのない名の中に“奥大日”“薬師”“赤牛”“水晶”が出てきた、晴れていれば、バスの車窓から見えるそうだが今日は見えない。森林限界を過ぎた大草原、立山連峰に向かってなだらかに登っている。バスはその大草原を縫うように曲りくねって登っていく。

ヘルメットをかぶった初老の工事人夫、足場丸太を担いでよろよろバスの横にいる。「えええ ひょっとして もう雪の準備」と驚いたが、明日、登る山で、何年か前、初雪で遭難した団体がいたのは10月の初旬。もう何日もすれば山の上から雪が降り始めるのだ。

“奥大日”3年前の夏のシーズンに澤山・河瀬さんで行った。室堂でバスを降りると、まだまだ雪が残っていた。陽がキラキラのなか、すごい景色のなか、今回と同じテント場で寝た。澤山さんと二人で称名の滝まで歩いて下った。下るにつれて温度が上がり、着いた時には全身汗で濡れていた。河瀬さんはバスで下った。

“劔”も登った。最近では6年ぐらい前、衣川さんと、劔を横に見て、水平道を歩いて下った。室堂から別山乗越、劔沢でテント泊。劔沢を下り、有名な水平道を通った。仙人ダムまで下ると暗くなったのでダムサイトでテント泊。翌日は櫛平まで下り、トロッコ電車を乗り継ぎ、立山駅の駐車場へまわって、車で帰った。

“薬師”亡き阪口さんと30年前。有峰から太郎小屋でテント泊。スゴ乗越で小屋泊まり。当時ここはまだランプしかなかった。翌日は、五色ヶ原でテントを張っていたら雨が降ってきた。テントの中にも雨が降った。大慌てで小屋泊まりに変更。当時のテント、性能が悪いのか、フライを持っていなかったせいなのか、まだまだオレは山初心者の時代だったのでわからない。翌日外せない仕事があり、一の越で別れひとりでバスに乗って帰った。阪口さんは雄山をまわって帰ったのか、何日か後にニコニコと会った。

“赤牛”薬師からしばらく後、澤山さんと室堂から黒部湖に下り、ダム湖を渡船に乗り、奥黒部ヒュッテに泊まった。小さい粗末な山小屋の景色が頭の中に残っている。壁にはヤマメの魚拓がいくつも貼ってあった。30センチを超

える自慢の品々らしい。当時毎月1回2回と山に登っていた、「あ 先日会いましたね」という出会いが何度かあった。人があまり来ない僻地の山、「ややや」と邂逅を楽しんでいた。その小屋から長い時間をかけて赤牛に登った。“水晶”まで足を延ばし避難小屋で寝た。雪のなか、女性の単独登山者がテントをはっていた。帰りは鏡平から新穂高温泉で帰ったのか、記憶が飛んでいるので定かではない。

16-069 立山-Ⅱ 300916

初日の夕方4時、重い荷を担いで歩き出した。雷鳥沢キャンプ場まで1時間足らず、なだらかに下っていく石の遊歩道。1.8リットルの、酒と焼酎が2本、缶ビールが8本、ガスボンベが5本、肩に食い込む重さだ。キャンプ場が見えだしたあたりから雨が降りだした。「あと15分待ってくれたら・・・」Mさんのぼやきが出る。夏には100ハリほど張ってあるテント場だが、さすがに今日は10ハリぐらい、それでも雨の中、テント泊の人たち。水はすぐそばに豊富、トイレも水洗、ひとり500円也。A・Mさんコンビの旨い鍋、水に浸ければビールもすぐに冷える、乾杯。

二日目の朝7時、テント場の人の話では雨が続き久しぶりの陽のひかりらしい、少し雲があるだけで空は青い。このあたりの山肌の美しさはすごい。低木の緑色、石の白色、紅葉の黄色と赤色とオレンジ色、枯れ草色、雪があれば真っ白、土の黒褐色。今日は雄山を反時計回りに行こうと思っていた。「こっちが近道」Mさんの声「おお 知らなかった」とキャンプ場からいきなり渡渉、一の越を目指す道を探すとすぐに見つかった。石畳を室生まで戻ることを考えれば、人のいない自然道のほうが、ずっといい。

雄山のとっぺんにやってきた。石ゴロゴロの山、止まってはいけない、と登り続けた、まだかまだかと思いつつ、とっぺんに着いた。鳥居、社務所、有料の先端部分、神主氏のオレンジ色の衣がまばゆい。加賀藩が大昔、ここに社を建てていたようだ。屋根には大きな石が並んだ先代社の写真があった。銘板に360度、山の名前が記されている。ハクサン・ヤクシ・オンタケ・クロベゴロウ・カサ・ノリクラ・アカウシ・ホダカ・ヤリ・ノグチゴロウ・オテンショウ・ツバクロ・アサマ・カジマヤリ・トガクシ・ゴリュウ・シロウマ・ケガチ・ネコマタ、ほとんど行った山だ。

大汝休憩所の横で、湯を沸かし、カップヌードルにコーヒーの昼食タイム。なんだか急にガスがかかり始めた、普通、山の上は午後の2時3時になると天気が急変することが多い、今日は少し早めにガスが出てきた。ガスが晴れたり曇ったりのなか、稜線歩き、大走り分岐から下りだした。別山乗越から雷鳥坂を下りたかったが「今日はこれぐらいで 勘弁してやろう」なんて駄洒落を吐きながら、機嫌よく下った。

3:30 テント場に帰ってきた。汗はかいていないが、「まずは温泉」と風呂セットもって石畳に登った。「あつつ」「こんな熱い湯に はいれるか」と時間をかけて湯船に浸かった。さっさと出て身体を洗う、石鹸もシャンプーもある、もう一度湯に浸る、今度は熱く感じない、身体がぼかぼかだ。「温泉は最高だ」という皆さんに逆らって申し訳ないが「何が温泉 ショウムナイ」と普段ぼやいているが、温泉も入ると気持ちがいい。立山のこのあたり、3階建てぐらいの大きな規模のホテルが20、30軒ぐらいある、ここは観光地だ。「高野山も 永平寺も 聖地じゃなく 観光地だ」とぼやいていた、観光地が日本の文化か、きれいな建物、洗練された街、旨い食事、洒落た土産物、客を呼ぶための街づくり、ほんまにこれがいいのかね、もうちょい肝の据わったモノがないのかね・・・。

「雷鳥を見ないね 雷鳥沢というのに」と思っていたら人がたたずんでいる。今年初めての雷鳥君との出会い。黒と白のまだら模様、大きな奴が3匹もいる、うれしいねえ。

三日目の朝、雨が降っている、この雨ではどこにも行けない。コーヒーとコーンスープ、パンとキュウリ・トマト、旨い朝飯を食って、雨具を着こみ、靴を履き、かたづけ始めた。雨の中、テントをたたみ、ゴミを集め、パッキング、ザックカバーをかけたらでき上がり。トイレで会った若い単独女性、今から奥大日、一泊して称名の滝まで歩いて下るといふ。今日のような天気、「気を付けて 行って」と声掛けしたが、この天気「山は やべえよお」

この季節、天気が悪く寒い山から麓に下ると、「晴れている 暑い」が普通なんだけれど、今日は違った。ますます降ってきた、気温もうすら寒い。大阪に近づくくと大雨の模様、なんと高槻あたりの名神高速道路が20センチほど冠水と驚いた。車のワイパーをフル回転させてゆっくり走った。